

安藤朴翁

ひたち帯

古文書学習会編



## はじめに

丹波国の国学者安藤朴翁（寛永四年生まれ、元禄十五年没）が水戸藩の彰考館に招かれた二人の子（安藤為実・安藤為章）と甥（安藤定輔）を訪ねて、元禄十年（一六九七）水戸へ向かった。そのときの紀行文が「ひたち帯」である。

本会編集の『道中記にみる江戸時代の日立地方』（二〇〇八年 日立市郷土博物館）に「ひたち帯」のうち九月二十三日から二十七日の水戸領北部の旅の部分を抜粋し収録したが、今回あらためて全文を翻刻する。

なお「ひたち帯」については、現代語訳されて出版されている。猿渡玉枝訳『ひたち帯 元禄常陸紀行』（一九九四年 筑波書林）である。今回の原文の翻刻にあたって参考させていただいた。

## 凡例

本書のテキストは、久松松平氏家臣である駒井篤宿（通称・忠兵衛）がさまざまな文献を書写した「篤宿雜記」（文化十二年以降成立 国立国会図書館蔵）第八十九・

九十巻に収録された「千年山集抄記」による（以下、駒井本）。より正しくは前出猿渡訳本に掲載された影印版による（現在は国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧できる）。

なお「ひたち帯」はこれまでに、岸上質軒校訂『校訂続紀行文集』（一九〇一年 博文館）に「常陸帯」として翻刻され、また口丹波史談会編『ひたち帯』（一九七九年 口丹波史談会）によって翻刻されている。『続紀行文集』の底本は不明で、ルビや句点が付され、漢字が多用されるなど一般読者への配慮がなされている。口丹波史談会編のものは出雲神社（京都府亀岡市千歳町）蔵の自筆本という。

自筆本には駒井本にはない記述が数多く見られる。しかし駒井本にある久我静斎と安藤為章の跋が伝自筆本にはない。つまり本書駒井本は推敲が重ねられ、そして跋がおかれ、作品として完成したものがそれに近いものを写したものと考えられる。

なお安藤朴翁やテキストについて、より詳しくは前出の猿渡訳本を参照されたい。

書名「ひたち帯」について、上巻と下巻ではその内題が異なる。上巻は「常陸帯」下巻は「ひたち帯」とするが、久我静齋の跋文に、朴翁が書名について静齋に意見を求めてきたとき、末尾にある歌（あつまちや國の名にあふひたち帯…）からとってはどうかと言ったところ、朴翁は「ひたち帯」としたとあり、これによった。

翻刻にあたり原本の形式や表記方法を残すようつとめたが、編纂の必要上と読者の便宜をはかるため次のように取り扱った。

(一) 適宜読点をつけた。原本に読点はないが、編者において付した。

(二) 仮名について、カタカナはそのままとし、変体仮名はすべてひらがなに改めた。本史料では原則仮名に濁点が付されることはないが、ときおり濁点が付されたものがある。原本のままに表記した。

(三) 漢字は原則として原本の表記通りとしたが、一部異体字を正字に改めた。

(四) 合字はひらがなあるいはカタカナに改めた。

(五) 繰り返し記号は原本のとおりとした。

(六) 割註について、文字を小さくして一行に収め、／によって改行位置を示した。

(七) 敬礼のための闕字は一字空闕とした。

(八) ( ) は編者による。

○

本史料の解説には日立市郷土博物館の自主学習グループ古文書学習会があたった。参加者は次の通り。

赤津俊明（代表） 久保睦子 小林祥司 佐々木久

島崎和夫 千葉椎奈 萩原明子

テキスト入力は赤津俊明が行った。

目次 （目次を置くような作品ではないが、利用の便宜をはかるため旅程等を示す）

常陸帯 上 ..... 7

前書 ..... 7

三月六日丹波国桑田郡小口村出立 ..... 7 十二日京出立 ..... 9 十三日草津宿出立 ..... 9

十四日土山宿出立 ..... 10 十五日雲出宿出立、伊勢神宮参拝 ..... 10

十六日下有爾村明星茶屋出立 ..... 11 十七日神戸宿出立 ..... 11 十八日熱田出立 ..... 11

十九日御油宿出立 ..... 11 二十日白須賀宿出立 ..... 12 二十一日中泉寺出立 ..... 12

二十二日島田宿出立 ..... 13 二十三日江尻宿出立 ..... 13 二十四日沼津宿滞在 ..... 14

二十五日沼津宿出立 ..... 14 二十六日小田原宿出立 ..... 14

二十七日戸塚宿出立、江戸着 ..... 15

四月一日藩主綱條に拜謁 ..... 16 四日江戸出立 ..... 16 五日白井宿出立 ..... 17

六日津ノ宮出立 ..... 17 七日飯島出立、水戸着 ..... 18

ひたち帯 下 ..... 19

前書 ..... 19

四月十五日綱條から時服賜る ..... 20 十六日水戸東照宮参拝 ..... 20

十七日東照宮祭礼見物 ..... 20

五月二十三日天徳寺参詣 ..... 20

- 六月十二日西山で光圀に拝謁：21 十三日正宗寺参詣・瑞龍山墓参：22  
 十四日久昌寺、天神林村七代天神宮参詣：24 二十五日白井信胤邸で百韻興行：25  
 七月十三日湊村、磯浜村：25  
 九月十二日日光へ水戸を立出：25 十三日茂手木立出：26 十四日宇都宮立出：27  
 十五日鉢石立出、東照宮参詣：27 十六日宿坊立出、水戸へ：29  
 二十二日光圀から紅葉狩りを勧められる：29 二十三日水戸立出：29  
 二十四日大中村立出、里川村から磯原へ：29  
 二十五日横川村立出、勿来関、磯原御殿：30 二十六日磯原村立出：31  
 二十七日滑川村立出、村松日高寺・真崎浦見物、水戸着：32  
 後書：33  
 跋 静斎（久我通名）：33  
 跋 安藤為章（年山）：34  
 餞別詩歌：34

ちとせ山の麓小口の里に、身をやうなきものにおもひは  
 ぶらかし、さるうばそくありけり若かりしほとハ、玉し  
 きの都のうちくれ竹のそのふにあそひて、みしかきつか  
 さ位にほだされつゝ、世をいとまなうのミおくり過し侍  
 りしか、つねに帰隱のほい深くしてつひにむそしの秋を  
 むかへて、かくれたるすみかをしめ坐禪讀經の窓のうち  
 に、世中の無常をさとりて如露亦如電の觀をなし、身の  
 うへの有為をいとひて遠離諸幻の念をこしす、独處山林  
 ハ法華の妙文制心一處ハ遺教の金句也、されハ隱居の師  
 友ハ佛の道にまさりたる事あらしとおもひとりて、むく  
 らの戸さしをさへかきもはらハぬ身のはからさるに、こ  
 としの春やよひの初めはるくも東行をくハたてり、是  
 ハ翁か二子為実、為章、猶子定輔この十とセあまりあな  
 たより水戸侯の御もとにつかへて、久しうあひみぬゆか  
 しさをもはるけ、またハ新婦兒孫のさかへをも見セま  
 ほしうなど書くときたる文に、旅よそひくさくさの物と  
 り具してむかへもよほし侍るか、おもへハ年の矢のはや  
 くもうつるはかなき、今ハはや古希のよはひに一とセこ

へたる身の露の命を論すれハ、岸の額に根をはなれたる  
 草江のほとりにつなかさる舟のこし、眉に霜ふり、か  
 しろの雪積り、ミつわくむまで老さらほひながら、長途  
 の旅行いとふようなる事なれと、かれらか孝志もたし  
 かた、かつハいまた參詣せざる寺社をも巡禮せまほし  
 うて思ひ立ことになりぬ 六日のあしたかとしてするに、  
 砌の桜やゝつほミなからまた咲そめざるをしハらくなか  
 めて

立いてん空もおほえず咲ぬへき花の梢のなこりをぞ思ふ  
 千年山の山祇にとて

しハしたゝ旅たつほとそちとせ山すミわひてしと人にか  
 たるな

千年の社一宮出雲ノ大明神ハつねに護法の善神とたのミけ  
 れハ、御いとま申にまふて侍りて、

老か身をさらに祈らすミつかきのひさしかるへき世をい  
 はふ也

當社ハ元明天皇和銅二年出雲の國大社より影向まし  
 くゝてこの所に跡をたれ給ふよし、風土記にも鎌倉の  
 御教書にも載られたり、類聚國史に弘仁九年十二月乙丑

桑田郡出雲社預名神と見えたり、第一宮のよしハ延喜式に明らかなり、正一位の神階ハ後西園寺殿 実兼ノ公 日記にしろるされたり、其ほか三代実録、東鑑、兼好法師のかけるものなどにも此御社の事見えたり、御本社ハ素戔嗚尊、稲田姫也、上の御前ハ大己貴命、三穗津姫にておハします、當社をよめる歌古クハいまた見及侍らす、夫木集、高範家集、浄泉和尚の記などに載られたるをこゝにうつし侍り

うこきなきちとセの山のミつ垣ハ久しき御代のしるし也  
けり  
頼氏朝臣

わかたのむ千とセの山の宮柱すくなる道を猶や仰かむ

等持院贈 左大臣

こゝもまた出雲八重垣しめひきて神代の春をいはふ里人

藏人大夫高範 号千秋

妻こめのむかしかたたらふほとゝきす出雲の神もあはれと  
やきく  
長松軒惟翁

一の禰宜広瀬氏をたつねていとまこひしつゝ出雲坂をの  
ほりてかへりミれハ、我かくれ家の梢もいちしるく見え  
てさすかになこりおほきものから

千年山尾口の里の朝かすミ立かへりても見まくほしけれ

四郎為宣をはしめしたしきともからおくりきて、今す  
こしなといへとしひてこしらへかへしつ、七谷をいく  
度となくわたりて、

すゝか川なかれやかよふこゝもまた八十瀬をわたる七谷  
の水

原の里に入「見せ諸古くちに山城丹波の界有、玄旨法印の歌と  
て、山城の原のよろひ田きてミれハかふとの森に弓か  
けの松といひつたへ」侍り、猶さえかへるあたこおろし  
身にしみていとさむし

あたこ山ふもとの原の里さむミ花待遠に見ゆる木々哉

水尾村を過るに清和の御廟ハ松かけしけりていとさひ  
しくをかまれ給ふ、西行法師か崇徳院の御廟に参り  
て、よしや君むかしの玉のゆかとても、とよミしもよ  
そならずおほえ、かつハ文集古墓の詩など思ひ出侍る  
まゝかしこけれと

八隅しゝわかすへらきの塚とてもふりにし後ハたゝ春の  
草

清瀧川をわたりて嵯峨の里につきぬ

しつかなるわか山すミを立出てうき世のさかに又も来に  
けり

ちとせ山より嵯峨までわづかに三里かほとなれとも谷峰  
はなはたけハしうして、肩輿をになふやつことも労れ  
ためりとて、仁和寺なる真光院僧正の御坊へ立より  
やゝ久しくやすらひて、都にいたり湯川氏のもとに逗留  
し侍るに、かなたこなたよりよひむかへて馬のはな  
むけしつゝ日ことにいとまなし、人々送別の詩哥数多  
けれハ中々にもたしつ 十二日、都をいて、粟田山の  
ほとりまで三郎為興など、わりごやうのものたつさへき  
てなこりをしむに、仲秋の頃ハかならずかへりこんな  
ど約しつゝ

かへりこむ秋をちきりて行鷹のおなしつらなる春のわか  
れち

山科を過てあふ坂にかゝる関の清水ハ

老らくのかけもはつかしあふ坂の関の清水ハむすひしも  
せし

といひて過ぬ、予竹園に侍らひしころ東行いくたひと  
いふことなし 故幕府家綱公ハ後妙莊嚴院貞清親王の婿君なりノ

御外戚の御よしミにて毎年歳首の賀使をつとむ 年わかゝりし時

ハ、筆まめやかにして名所むまやちをも細やかにしる  
し、人わらへなるこしおれ哥をもをり過ぎぬほどにと  
心さし侍れと、今ハ手ふるひまなこかすみて道の記と  
いふもの書つけむともおもはず、いはんや三十一字をつ  
らぬへきいとまにハ六字の宝号をとなへ、又ハ千部の  
数をミてまほしき法華讀誦を肩輿のうちの所作とし  
て、いつこの名所にもめをうつすまじうおもひおさめ  
なから、ともすれハ旧染のくせにそゝのかされて、い  
さゝか物にかいつくる事になりぬ、されと都より江戸  
までハまへくの記行にも委しくしるしたれハ、老のく  
り言さのミハとておほくハ略す、いつしか粟津か原を過  
てせたの橋をわたるに、めしくせか者共のあれなん石  
山寺よといふを聞て、南無救世観世音ととなへなか  
ら、  
たのむそよわれ世の中のことたれてしめちか原にくちぬ  
ちかひを

こよひは草津に草の枕をむすふ 十三日、草津をい  
てゝくるに鏡山ほのかに見えはんへるといへは、

わか姿うつさはいかにかゝ美山しらぬおきな心地しぬへき

石部、水口など過て土山を宿ときたむ 十四日、鈴鹿山をこゆるほど雨しきりにふりて物うさのまきらハしに狂句

春雨やふつたりふつたり鈴鹿山

権現の御社をおかみやそ瀬川をわたるに

八十瀬川またやわたらん七そちをこえてくるしき老らくのよに

伊勢参詣もあまたゝひなれと、今ハこの世のまかりまうしにとて関の駅より右の方におもむきて安濃津をすき雲津に宿す 十五日、天気うらゝかにして神明の冥助もたのもしく、度會郡宇治の郷神路山五十路の河上内宮に参詣す、天照皇太神一座、相殿に手力雄命、拷幡千々姫命二座ましますとそ、敬礼のあいだ幣帛をもさゝけす念珠をもつまくらす、心中にいさゝかも願望の念なきを内清浄のならひとす、儒者の未発の中佛家の一念不生といふもしらす、ひとつおもむきにへしや、それ天照太神御影をうつさせ給ふ神鏡、すなはち神孫に傳

ハりに禁中にまつらせ給ひしに、第十代崇仁天皇神威をおそれ給ひて、大和の国笠縫の邑に神籬をたてゝあかめまつらせ給ふ、これ皇居神宮わかたれし始也、十一代垂仁天皇の御宇、神託によりて倭姫の皇女神鏡をいたゞき奉りて御鎮坐の地を尋られ、つひにこの神路山に跡をたれさせ給ふとかや、

ちはやふる神代のかゝみくもりなくたかしりてらす宮はしらかも

今ハ何ことも放下せし、心にも猶児孫のゆくゑを忘れぬにや、

老か身ハはや七そちもくれ竹のこの一ふしをなを祈るか

夫より沼木郷山田の原外宮にまうつ、天照豊受太神宮一座、相殿に三座皇孫尊、天児屋根命、天太玉命おはしますとそ、當宮御垂跡ハ人王廿二代雄略天皇御宇、天照太神、大佐々命に神託ありて豊受太神を當國へうつし奉るへきよししめし給ひしまゝ、命則朝廷へ奏し給ひて丹後国与謝の郡より遷幸なし奉れしとかや、すへて両宮共に鳥居の冠木もそらず、御殿に檜皮をもふか

す、ミつかきに丹朱をも色とらす、ひとへに正直の理を  
あらハしかつ質素の風をしめし給ふとそ

神風や豊受の宮のみしめ繩かけていく代を守りますらん

天の岩戸にてミあかしの光を見侍りて

岩戸あけし神代おほえてもろ人のおもてしろくもてらす  
ともし火

宮めぐりに日かけかたふきて、こよひハ明星か茶屋を  
泊りとす 十六日の暁東の空に明星の光きら／＼しき

を見て、亭のあるしにたはふれける

旅まくらあかつき起の空はれて名もくもりなき明星か茶  
屋

安濃の津、上野、白子などとほりて神部にやとりと  
る 十七日、けふハ順風に帆をひらきて、七里の舟わ

たしを越、また未の刻はかり熱田につきぬ、宮めぐり  
せんとてこゝをとまりにさたむ、則沐浴して参詣す、八

劍の御本躰ハ天叢雲劍を安置せられたるよしなれハ

神風や天のむら雲吹はらひ光あらはす八劍のミヤ

社中に太真殿といふあり、源大夫の社といふ有、この名  
につけて俗説に御神躰ハ揚貴妃なり、かの方士か尋し蓬

萊山太真殿ハ則當所なりといひ、源大夫ハ玄太輔とか  
きて玄宗の事也とひがことをいひならハしぬ 見曉／風集  
あまさへあないもしらぬもろこし人にさへいひ傳へて  
詩を作らしむ 見宗景／兼集 神靈をけかし奉る妄語のつミ  
おそろしくそ覚へ侍る 十八日、熱田を出て鳴海のす  
くを過るほと

日にそへてふるさと遠く鳴海かた立かへる浪にことや傳  
まし

池鯉鮒を過てゆく／＼八橋の跡ハゆかしけれと程へ  
たゞれりといへハ得も立よらす

かきつはた今もさくやとよそなから心に懸て過る八はし

矢はきの橋ハ二百八間あり東行第一の長橋そかし、岡  
崎、藤川などを經て二村山宝藏寺に参詣す、此寺ハ東

照宮なほ和光のいにしへ御手ならひせさせ給ふ所とか  
や、今ハ神孫五代にあたらせ給ひて、四方の海浪しつか

に一天風おたしけれハ、かゝる老法師の旅路さへなに  
しおそるゝさハリなきも、しかしなから此御恵と思ひ

奉れハ、御手習の御旧跡さへもいとたふとく拜ミ侍り  
ぬ、赤坂を過て御油にやとる 十九日、夜の雨はれて

日影長閑なり、二川をすぎ塩見坂にかゝる、万頃の蒼波雲につゞきたるに、数点の商船風に任せたるハ婦雁のつらをみたりたるに似たり、是なん遠江の灘といふをきして

はるく〜ととほたあふみの沖の海を心ほそくもわたる舟人

めしくせるものゝ中にいさゝかいたハる事ありて、また日影たかけれとも白洲加にとまる 廿日、荒井の関所には幕を打ち、屏風をかさり、鑓、長刀、さすまた、つくほうなどいふ武器をそなへて、関守の諸士をこそかに列せり

あつまちや名さへ阿ら井の関守ハとかむる聲も分ておそろし

舞阪を過て、一里はかりもやきぬらんとおほゆる道の左りのかたに深田あり、名にしおふ引佐細江といひ傳へたり、萬葉集に、とほたあふみ、いなさ、細江のミをつくし、とよめるうたをおもひいてゝ

老にけるわか身をつくしきてミれハいなさほそ江ハあせはてにけり

濱松のむまやを過て天龍川をわたり、ゆく〜中泉村に至る、この前の中泉寺の現住ハ、さ、いつころまでわか千年寺 今号／東光寺 の住持にて朝夕に見し人なれハ、安否も聞かまほしくてかりそめに立寄侍りしに、おもひかけぬ御下向なといひて、いとなつかしミたるもてなししつゝ、わりなくとどめらるゝもいなひかたくて一宿しぬ、夜もすから昔今の事共かたり明す 廿一日、中泉寺を出て見付の宿をすぎ、袋井のあたりより久能の城山近くミゆ、掛川、日坂などゆき〜てさやの中山を越るに、かの西行上人命也けるとよまれしもまさしくわか身のうへのやうにおほえて

あつま路や我もむかしの跡とめて越るそのちさやの中山

いさよひの日記に、さやの中山をこゆるほとことのまゝとかやいふ社のあたり、道いとおもしろしとかゝれたれハ、今もさいふやしるやおはすととへともしれる人なし

かきをきしむかしの人のことのままゝにたつねこそ見ん神やいますと

菊川をわたるに承久のいにしへ、宗行の中納言西岸に宿して命をうしなふとかゝれし事思ひいてゝいとあはれ也、大井川ハよへよりけさまでの雨にみかさまさりて、行人多くハ金谷の宿に滞留をしか、少し水落てかみなかしも先をあらそひわたるさま、宇治川の先陣をいとミしむかしのおもかけ心にうかひぬ 廿二日、島田をいて、瀬戸川をわたる、道の左に桜のやゝ盛にひらきたるを見るにも、抱琴園を出たちし時まだつほもし梢も、此ころハ盛ならましなと思ひやりて、古郷恋しき折から杜子美か感時花濺淚といふ句をおもひいてふるさとの春やいかにと東路の花にもそゝくわかなみたかな

藤枝、岡部など過て宇都の山にかゝるほと肩輿をおりてかちよりゆく、在五中将の集に、わケ入らんとする道ハいとくらうほそきに鳶、かへてしけりてと書給ふハ、今ハ峠をきりたいらけて道いと廣くつくりあらため京、江戸ゆきゝの人あし、その鳶、かへてよりハこよなくしけれり

いにしへの鳶の下道ふミかへて人めそしけるうつつの山こ

え

まりこ川をわたるとて

宮人の春のあそひのまりこ川けあくる波を袖にかけつゝ安部川をわたりこからしの社を西の方になかめ、駿河の府中にいたりて浅間の社にまいる、莊嚴の清らハ都かたにもたくひなくそ拜し奉る、細工のほりものなとこまやかに見侍らんとて、懐より目かねとり出たるに、けふハ江尻までつきさふらふへしとて、いそかハしけにもよほしぬれハ大かたにて下向し侍りぬ 廿三日、江尻をたつ、清見寺にのほりて暫く眺望するに、老眼もいとさハやかなる心地そする也  
清見かたなミまはるかになかめやるめちにハ障る関の戸もなし

田子の浦富士の勝景いへハ更なり、まことに東行第一の壯觀、いにしへより歌人詩客心を盡し、詞をみかきたる秀逸あけて算ふへからず、予も心ある身なりセハ何くれの趣向も有ぬへけれど、元より雅場に立入らざりしくいハ八千たひも今更かひなし、されハとて此佳境にいたりて、もたしはてなんもむげに口おしけれハれい

の腰をれを

七そしのかしらの霜とくらへ見はいつれ高けんふしのし  
ら雪

またやみん田子の浦波富士の雪あふさきさるさの春のけし  
きを

過し万治三年の秋なりかし、竹園 円実照院／貞致親王 故大  
樹へ御對顔のため御下向ましましける時、藏人冬仲の  
ぬしと共に供奉せしに、詩哥の唱和数篇におよひたり  
し事にと思ひ出て、しきりに懐旧の涙おさへかたし、  
宮も冬仲もいつしか眞源にかへり給ふに、翁ひとり残  
りともまりて、老の後またこのさかひに遊ぶ事、おも  
へはつれなき命そかし、そのおり宮の御歌あまたあり  
し中に

あつまちにくたりゆく世のうきふしもわすれてむかふふ  
しの山まゆ

とよませ給ふなんいかなる御心にか有けん、浮島が原  
の廣々として、あしたか山のみとりをひたせるハ繪に  
もかゝまほし、けふは空心よくはれて四望くまなくい  
とおもしろかりき、沼津にやとりをさたむ 廿四日、

あかつきより雨をやミなく降出たり、亭のあるしむかし  
よりたひたひ見なれたるものにて、ねんころにもものし  
けれハ、けふハ雨やとりしてこのほとおこたりつる日  
記をつくのふ 廿五日、雨なこりなく晴たり、沼津をい  
て、三島の社に参りしはらく法施まいらせて

後の世をいのる心をあはれとも見しまの神に手向てそ行  
宮根のむま屋に上りかれひくひてしはらく休ミ閑所を  
すく、これも関守の厳密なる事荒井におなし、權現の  
御社にまいる、満月上人草創のよし東鑑にか見えたり、  
湖水のみとりにさきよく岸の梢めくミわたれるに、山  
さくらのかなたこなたにほひ出たるけしき又類ひな  
き境地也、ともまりはつへきにあらねハかへり見かち  
にて

ミね深き箱根の山の春かすミたましをしくかへりみる  
かな

猿すへりかしの木坂なといとさかしき道を下りて、湯  
本、早川など過てこよひハ小田原にとまりぬ、海近け  
れハ浪のおと枕にひゝきていとねさめかち也 廿六  
日、小田原を出て、ゆく／＼小餘綾の磯ハさしも名高

き所なれハ暫立とまりて

おきつ風岩うつ波ハこゆるきの磯山さくら散かそそみる

大磯の宿へ入らんとて、道のかたはら清水の流るゝ所に鴨立沢といふ文字を石にゑりたるを見て、肩輿よりおり寺門にあないして西上人の影を開帳させ、やゝ久しく休ミて立出るに住侶予か袖をひかへて、かゝる古跡にいたりなからむなしくやハとそゝのかし侍る、おりしも鶯の鳴を聞て

鳴たちてあはれさひしき秋もあれと鶯來なく春の夕くれ

といひすてゝ過ぬ、平塚をとをり藤沢をすぎ戸塚をやとりとす 廿七日、程かや、神奈川、川崎など過て、海のおもてはるゝあなたに筑波山ほのかに見ゆるなといへと、老のまなこハいつとなくかすミへたてゝ定かならず、その山のあたりこそわか心さし行子ともすミかならましと、そゝろになつかしけれと、此たひはしめて行道なれハ、おほつかなく心やまし、またふる里ハ千山萬水のそミをうしなふ、とにかくに旅ハものうきものとおもひしりぬ

おほつかな過こしかたも行末もかすミこめたる中空にし

て

品川の宿に入てゆくゝ人あししけく賑ひつゝ、旗本の諸士馬のりものゝ行粧、大路もせはく行ちかひ市申たからをひらいて、人ハかへりみる事あたはず、車ハめくる事を得すと、班固か西都の賦にかけるもよそならずおほゆ、瓦葺の雲に聳え、雉堞の日にかゝりきたる細柳營の御城居ハ申もさら也、侯伯子男の朱門高館こかねをちりはめ玉をかさりたるさま、めもかゝはゆく心もそらにそ覚え侍る、見ぬもろこしハしらす聞つたへたる大内裡のむかし、鎌倉室町の中ころ安土大坂の繁華とても、今の江戸にたくらへてハ十分か二三なるへし、おほよそわかみかと六十よこくのうちにたくひなき天府の地とおほゆ、されハかけまくもかしこき東照権現の神慮をめぐらされ、慈眼大師の法智をそへられて御草創の瑞域なれハ、悠久をひさかたの天にひとしくし安寧をあらかねの地に期する成へし

むさし野や三葉四葉の殿つくりさからん代々のかきりしられす

さても竹園 邦永ノ親王 御家督相續の後、幕府へ御對顔の

ため御下向ましまししかハ長子為実も水戸よりのほり  
あひて久別の情を述、新會の歡を催しつゝゆるやかに  
休息す 四月朔日、このころ予か下向のよし、いかに  
してか水戸侯宰相中将／綱條卿の高聴に達して御對面給ハ  
るへきよし仰下さるゝに、今ハ世外のさたみおさなな  
に、か宮中にまうのほり侍るへき、こいたく辞し奉れ  
とも時宜いなミかたくて、けふしも小石川の殿にて拜  
謁す、御嫡少將君 吉孚／朝臣も出させ給ひてらうたけな  
る御よそほひを見まいらせつゝ、老の皺ものべやる心  
地そし侍る、執事のあしあし出あひて御饗應ねんころ  
なるあまり、御壺の山水を見せさせ給ふ、この御壺ハ京  
江戸にもまた類ひなき聞えありて、故東福門院御在世  
の時圖にうつして御覽せられし折ふし、仙洞 後水／尾院  
にもうち／＼觀覽まし／＼て御感賞おハしましけると  
ぞ、まことに山をたゞミ岩をかさね池水の心ひろさな  
かれをひきて、苗代小田にたゞハ峯の櫻の梢をましへ  
たるハ、よし野初瀬にかたとり清水なかるゝ柳かけに  
ハしハしとて立とまりぬへく、楓江の洲崎ハ龍田川の  
秋を思ひやらる、簾をかゝけてハ雪見の亭、瀧をきく

にハ音羽堂、そのほか西湖のつゝミ剡溪の船、からに  
やまとに名にしおふ處々をうつさせ給ふさま、拙き筆  
にもことはにもつくすへきにあらず、けにも源威公 故中  
納言／頼房卿の御時きつきはしめられて、西山公 權中納言  
／光園卿 さらに好事の心匠をそへさせ給ひ、當代にいた  
るまで年月ふりたるしにや、老杉古松みとりをふ  
かめ、珍禽奇獸なれ遊ひてあたかも深山幽谷にまよひ  
孤村荒野にさまよふ心地して、更に城市のいそかハし  
きをしらす、かの漢家の上林園六條の河原の院などをも  
のゝためしにかたり傳へ侍れと、そもかうやうにおく  
まへ侍らしなどおほゆ、予をみちひきたるこれかれし  
きりに一首とうなかし侍れと、れいのかたハらいなき  
ことはもていかゞハ佳景をけかし侍らんや、たゞ古郷  
にかへりてちとせの山かつにかたりも聞こえん時のこ  
とくさにとて、こゝろのうち

幾とせの月に霞に庭ふりてミ山おほゆる風のおとかな

ひねもすの勝遊を謝し奉りてたそかれ時に旅窓にかへ  
りふしぬ 四日、空心よくはれたり、けふハ江戸を立て  
水戸に赴く、為実あないして鹿島香取など巡禮すへし

といふ、角田川をわたるに折しもわたし守はや舟にのれといふこそおかしけれ、かのはしとあしとあかき鳥ハ川の洲にあり

みやことり今も川瀬にあかハしのむかしの跡をとへとこたへぬ

行徳といふ所にて船よりあかり、かまかへ八幡などをすき市川のわたしを左に見て下総の国府の臺へのほる、こゝ天文のいにしへ北條の氏康八千の人数をもて、両上杉八萬の大軍を破りし古戦場也、万骨かれて一将功なりし空しき名のミ傳ハれるこそいたハしき様也、総寧寺ハ通幻和尚の開基とかや、境静かに寺ふりていと殊勝也、寺前の馬場より東ハ小松原みとりをたゝみて霞る空につゝきたり、西をかへりミれハ江戸おもてはるかに見わたさる、南のはつれよりすくに眞間山へわけ入りぬ、本堂よりはしめ眞間の井、手兒奈の明神など参詣して継橋の旧跡をたつぬ、ミな古き名所なれハもたしゑすかしてれいの

かよひこし手兒奈の契り絶はてゝ名のミむかしのまゝの継はし

夫より田面岡山をこえて日蓮宗の談所中山寺へまいる、これもものふりてたふとき境地也、此ほとりを過てやうくゆけハかきりもしらぬ廣野也、南ハ佐倉へつゝき、北ハ小金原より下野の那須野へましハれるゆへに四十里野といふ名をえたり、野駒とも己かまゝに草をはミ、水を吞てその真姓<sup>(性)</sup>を得たるさま、馬蹄の篇を繪にかきたらん心地そする、都近き國にハ見もおよはぬものから又なき見もの也、世にほたされぬわか身のたくひにおもひ合せて

はるくくと野もせをひろミすむ駒の心もおなし身こそ安けれ

こよひハ白井に宿す 五日、木おろしといふより津の宮まで十六里か程舟にてくたる、河おもてに洲濱所々さし出たるに水鳥のさまくなるゆきかひ遊ふさまの面白きに、船子共のだミたる聲して、何ことに欺あらん、おのかしゝかたりのゝしれるも聞しらぬものゝいとおかし、津の宮にて船よりあかり十余町をへて香取明神へ参る、これハ経津主神を崇めたてまつるとかや、宮たちいとけたかく千木、鯉木物ふりて、実もゆ

ゑあるみやしろと見えたり、下向して津の宮にとまる六日、舟に乗て息栖の明神へまいる、これハ鹿島の別所なり、こゝより鹿島の大舟津へ打わたりにてミレハ、一の鳥居海の中へさし出ていとたかやかに作れり、二の鳥居まで十八丁か間つまさきあかりにのほる、三の鳥居楼門などをいりて神前へ参る、本社幣殿、直會殿、神樂所、竈殿よりはしめて厳重の大神也、當社武甕槌神ハちはやふる神代のむかし、香取の神と共に高皇産靈尊の勅を受けてこの界へあまくたり、さハへなす悪神を誅し給ふゆへに、このあしハらの中津國はたいらげくやすらげくをさまれるよし日本紀に見え侍れハ、わか國開闢の神功ことにすくれ給へるとかや、予わかき時さへおもひかけさりし廣前を老後におかミ奉るも、ふしきの御ちきりあればなるへし

ちきりあれハこの秋津洲の東なるかしまの神に手向をもしつ

為実もよみてたてまつれり

かしまかたよせくる波のしらにきてこれも手向ハ神のまに

要石ハ社のうしろの山中にあり、石のかたちハぬりをけといふものごとくにて石頭に窪あり、神槌にて打こミ給ふ跡なりといひ傳ふ、めぐりにいかきをゆひ注連を引たり、是より半里はかり南の山の中に、木深くかこひめぐらして、たとへハ内侍所などのごとく作りたる所あり、これをかの御齋といふ、かの齋宮のいにしへもかくこそとかうくしき身にしむはかりに覺ゆ、高間か原といふハ本社東へ廿町あまりあゆミ、白沙浩浩としてやゝこたかき所也、夫より濱のかたへ流あり、末なし川と名付その流にしたかひて下りミレハ、けにも水の末いつこともなく絶てまさこ地海に續きたり、濱辺に打出てミレハ過こしかたの南海とハさまかハリて、風すさましく浪たかうしてまことに東極のあら海なり

かしまかた沖つ汐風吹とよミこゝろくたくる浪のおとかな

なを磯傳ひに貝つもの拾ひ海水を結ひてなめあちはひなとしつゝ、ゆくく日もやゝ落かたに飯島といふ里にいたりて賤か家にやとりをもとむ 七日、飯島を出て汲

上、なつ見、大貫などいふ浦々を傳ひくるに、次郎為章大貫まで出迎て對面しつゝ、破子など取出てかみなかしもに盃すゝめやゝ時をうつす、そのほかしたしきかれこれよりも、此所まで茶酒かれいひなと心々に贈りていとゝにきハゝしきかた也、酔のうちに木おろしのわたしをこえ塩か崎、猿子田などいふ里々を過て水戸府につきぬ、府城の御構よりはしめ士林の第宅市町の賑ひ、これもものゆゝしきハ尾州の名護屋、紀州の和哥山にあひおなし、さ又一都會れハ此三府ハ御當家の宗室として、世の人御三家と称し天か下の御かためなりとかや、おきなも若きほとに尾州、紀州ハ見侍りぬ、水戸ハこの度はしめてあそふ地なれハ今一しほめつらかなるに、柳堤といふ道ハ時しも新柳の梢糸をミたりて半里はかりつゝきたり、左り右ハ千波といふ廣き沼水のみとりをたゝへて、蓮のうき葉もやゝひらきたるに、鴛鴦のところ得かほに人をもおそれぬさまこれもまた閑似我といはまほし、堤をゆくゝ梅戸といふ所にいたり為実か家に入ぬれハ、市川味禪翁 為実婦翁 猶子定輔をはしめておとも女もしたしきかきりにきハゝしく出むかへたる中に、愛敬おほ

きうなみ子ともいさましけに走りありくをあれハいかにととへハ、ミなかねて名をのミ聞およひたりしむまこらなり、かの晋の王質か仙境よりかへりて、七世の孫にあひたりしもかくこそと、ころこハしきものゝ又涙くミぬるも中々なりや、こよひハたかひにめつらしくよろこひにことふきをそへて、夜一よ盃をかよハしつゝ長途のつかれをもわすれてかたり明しぬ

ひたち帯 下

朴翁居士

此たひの紀行これまでに書をさめて、今ハはやなかきかた見にもとて子姪にあたへ侍りつるに、在水戸の間をりに触れたる腰折歌又ハめつらしき旧跡名所を見めぐり侍し事など、古里にとゝまれる子ともに見せ侍らんとて、さらに筆をそめていさゝか書つけ侍る、京より三月廿四日の文とおほき中にある御もとより仰下されし

ふしの根の雪にもおもへ九重のミヤこハ春の花のしら雲

御かへし

おもふその都の花のにしきにハたちもおよハぬふしのし

ら雲

(四月)十五日、相公ならひに少将君より時服何くれとめくミ給ハせしなん、まことに養老の御心さしいともかしこまりぬ、子どものよろこほひて、さいはいに秋のころ古里へかへらん時、錦の袂になぞらへ侍れなといふをきよて

今ハこのにしきもあやな黒染にかへぬころものうらミこそあれ

十六日、東照権現の御宮へまいる、府城の西南五六町はかりに岡山あり霊松山と名つく、松杉茂りものふりてをのつから如在の境地なり、朱の玉垣、石のきざハし、丹青のいろとり、花鳥の彫もの丁寧を盡せる莊嚴也、けにも府君の御祖神にてましまセハ、蕪藻のそなへおろそかならぬもことハりにこそ、供僧ハ天台宗五坊、浄土宗三坊あり、年ごとに卯月十七日ハ御祭禮なれハ、神輿をけふより御仮殿へ遷し奉りて田楽あり、貴賤の参詣ひきつらねていと賑ハし 十七日、荒町といふ所にて御祭會を、かむ、あまたのねりもの風流を盡せるさま京師の祇園會にもをさをさおとらす、供奉の諸士甲冑を着し、騎

馬の行粧嚴かにしてよき見もの也、神輿ハ三はしら東照権現、日光、山王権現なりとぞ

東よりてらす光もうらゝにてけふ神まつる水戸のさと人

五月十三日ふるさとの千年山にとまれる優婆夷のも  
とより文おこせたるはしに

たひ衣おもひたちにし東路のこのもとさそなすみよからまし

あさなゆふな佛のまへのおこなひもひとりさひしき山の下庵

など見え侍し、かへしに

ともに見ぬうらミそふかき東路のこのもとの花の盛を

うらやましひとりおこなふ山かけのあか井の水ハすミまさるらし

(五月)廿三日、先考法雲院 右京兆ノ定明朝臣の正忌日なれハ、西のかたにむかひて念誦のをりふし

ふるさとのそらに手向てよむ法の聲吹おくれあつまちの風

念誦の後岱崇山天徳寺へ参詣す、此寺ハ大明の心越禪師

生まれたる地也、明眼の老師と聞及侍れハ、はやくより相見のねかひ深かりしに法縁やなかりけん三とせ先に遷化せられたり、法嗣呉雲和尚に逢て禅談心ずみておほえ侍りし 六月十二日、朝またきに梅戸を出て西山へまいる、味禪、為実、為章、定輔など同伴す、那珂川のわたしを越て青柳、後臺、菅谷、額田の里々を過て久慈川をわたる、此川ハ萬葉集にまかちしぬきとよミたれハ

ゆく先をいそく旅路そ舟子とも真梶しぬきはやわたさなむ

といへハ船こそりてわらふ、禪翁と物かたりしつゝいつしか太田の郷にいたる、當所ハむかし佐竹氏の城地なれハ、今に古壘空壕有て懐古のおもひ浅からず、それより西の方斜なるこみち十町はかりも過て、午刻はかりに西山の麓白坂といふ東家につきて、湯あみ汗をさめて御山居へまいる、其道両方ハ山にて谷あひの田の畔をかなたこなためくる、山松の間に梅、桜、桃などあまた栽られたれハ花のころ思ひやられたり、田の面に鶴一雙をはなち飼はせ給へハ林和靖か孤山のすミ

かをとふらふ心地す、六七町もあゆミたらんとおほゆる程に柴橋をわたし、谷水をたへて紅白の蓮やうくさきいつる頃也、橋をわたりにて竹扉を入ぬれハ、かれこれ出迎へあないして御前へまいる、世の人泰山北斗のことくあふき奉る御名を余所ながら聞及ひまいらせしに、あやまたす威ありてのどやかにうくしうしてやすらかなる御容貌也、御冠を掛させ給ひて後ハ披髮長鬚野眼瀟洒として、まことに塵外の御姿すかしく見えさせ給ふ、御すまゐのさま、松のはしら、茅か軒は、竹のおばしま、すへてさらくしく、牆壁にハ葛むくらなどはひのほりつゝ、かの末つむ花の古宮の心地し侍り、さしも金城湯地の豊富をいとはやく當代へまいらせられて、かゝるやつくしき御すミかも元より御ほいのことハは申なから、愚かなるまなこよりハ御いたましきかたにそおほえ侍る、東語西話やゝ時うつりて晚餐を賜はる、調味いとこまやかにして枯腸をうるほしはんへりぬ、食後の緩歩ハ養生なりと宣はせて御庭を徘徊す、おまへの山より一脈の瀧流落下にたへて泉水となり、さらになかれて冷々

たり、盆池の唐蓮ハなかは開けて馥郁たり、常夏、さゆり、夏菊などませをわかちて見ところ多し、其外四時の草花数しらす、むへも御閑居のよき友かき也、谷のくまに文庫をかまへて和漢の書籍むな木にみちぬ、朝な夕な巻をすてすして日を消し給ふとそ、やかて本席にかへりて題をさくり御當座あり、をのゝ沈吟のあひたに秉燭に及び、風涼しく月さして蛩もしけちなといとえんなる夜のけはひ也 詠草数多けれハ別になつす初夜のころ夜娘を賜ハリ、酒肴しなゝの御あるしを謝し申に、予か伊蒲饌なる事をほいなき事に仰せらる、盃盤の半に色々造られうへたる洲濱の臺もたせ給ひ、いさゝかみけしきありて、御盃きこしめして翁に賜ハリ養老の上歌をうたハせ給ふ、やかて翁か盃めしぬれハ、かしこまりながら奉りて千世ませとくりことす、満座とりゝにうたひ、のゝしり、にきハしき聲々山祇もおとり出へきよるのさま也、それより御盃味噌已下に賜ハリ、かつハおのかしゝ猷酬し、肴核さまゝにして、夜半におよひぬれハ罷り申しの時、あすハこのわたり跋涉してあきたりぬるころかへりまうて

よかし、山家の風情にまかせたるあるしし給はんなど約せさせ給ふ 十三日、きのふの人々伴ひて増井の正宗寺に遊ぶ、開山ハ夢窓国師也、七堂の伽藍いともふりて誠に殊勝の靈輻也、住持雷啓和尚に相見終りて諸堂を巡禮す、此寺の後に廃寺あり、是ハ源義家朝臣貞任を追討の時調伏の法を行はれたるよしにて、忿相の阿弥陀佛物すこき御面貌にて立せ給ふ、此ほとりより雨降出て、雨よそほひひんなくて瑞龍山へ参る、此山ハ源威公の御時に御親族墳墓の地にしめ置せ給ひしとそ、麓に御参詣の御装束有、そのかたはらに吉江水貞といふ老人住みし下司をひきひて山中の掃除、廟庭の修復をつかさとる、山上に故正三位權中納言水戸侯源威公之墓 則頼房卿の石碑也 靖定夫人谷氏 則西山公の御母君也 哀文夫人藤原氏 西山公の故北御方/関白尋公の姫君 そのほか御一族の墳墓にいたるまでことごとく儒禮をもちひてほうふり給へハ、螭首龜跌馬鬣封にして石を疊ミ垣をめくらしして、甚清浄なるさま御孝志のほともいしるくそ拝し奉る、かたはらに明製の墓あり、是ハ舜水先生朱之瑜といひて、明季の真儒なりしか二姓に仕

ふる事を恥て大清の徵令をうけず、本朝へ逃れ來られしを西山公やかて御まねき有て、御師範にあふきかつハ書生をつけて經史文章を学はせられたれハ、今も其遺弟あまたありて、彰考館にさふらひ文字に委しく性理に明らかなる事、凡そ他方の学者のおよふへくもあらすとそ、舜水ハ天和二年に身まかりて、此山の苔の下にものせられしも不思議の縁なりかし、山のかたハらに西山公の壽藏あり、その碑面に御ミつから梅里先生墓としるさせ給ひ、碑陰の銘に

先生常州水戸産也。其伯疾、其仲夭。先生夙夜陪膝下戰々兢兢。其為人也、不滯物不著事、尊神儒而駁神儒、崇仏老而排仏老。常喜賓客殆市于門。每有暇讀書、不求必解。歡不歡歡、憂不憂憂。月之夕、花之朝、斟酒適意、吟詩放情。聲色飲食、不好其美、第宅器物、不要其奇。有則隨有而樂胥、無則任無而晏如。自蚤有志于編史。然罕書可徵。爰搜爰購、求之得之。微遜以稗官小説。撫夷闕疑、正閔皇統、是非人臣、輯成一家之言。元祿庚午之冬、累乞骸骨致仕。初養兄之子為嗣、遂立之以襲封。先生之宿志於

是乎足矣、既而還郷、即日相攸於瑞龍山先塋之側、瘞歷任之衣冠魚帶、載封載碑、自題曰梅里先生墓。先生之靈永在於此矣。嗚呼骨肉委天命所終之處、水則施魚鼈、山則飽禽獸。何用劉伶之鍾乎哉。其銘曰

月雖隱瑞龍雲 光暫留西山峯

建碑勒銘者誰 源光罔字子龍

〔送り仮名及び返り点は略〕

予この御文章にふかく感情おこりて道すから子侄にかたらく、本朝上世より公武の家々に達人あまた出おはすといへとも、文人ハ武を講せず武士ハまた文道にうとくして共に遺憾あり、今西山公文武の全才ゆたかにして、土をしたしミ民を恵ミ礼に厚うして奢をしりそけ、諫を用ひて佞を遠さけ古をしたひて今を廢す、善行のミつたへて邪なる御政をきかず、汝等さひはひに此賢將の営中に属しぬれハ、志をはけミ行をみかきて忠勤怠るへからすなどいへは、ミなれいのうなつく、それより旌校寺にまいる、かの義家朝臣奥州追罰のいにしへ、この地の桜樹に旗竿をよせてしハらく陣せられしより、その桜名を得てあまさへ寺号と成しとなん、けにも古木のやうたい十圍もありぬへく枝ハ数百歩の庭上におほひひろこり

つゝ、誠にいく百とせの烟霞をおひつらんとそ覚ゆる、  
是かれ詩作り哥よむ中に予も花の春をおもひやりて  
ものゝふの國の風とやおさまれる世にもわすれぬ花の白  
はた

猶名跡ともおかみにといふ人あれと雨もさやまず、かつ  
ハ西山の御約も時うつりなんとて是よりすくにかへりま  
いる、御まうけきのふよりもこまやかにして、夜に入ぬ  
れハ謡の興何くれと御ものかたり、小夜更てあすハ水戸  
へまかりかへり侍らんと御暇申に、またちかきほどに寂  
莫をとふらひねかすと、御あいきやうふかき御ありさま  
ともいひ盡しかたくてなん 十四日、白坂の休所をい  
て、久昌寺へ参詣す、惣門、楼門、多宝塔いとつきくく  
しく、本堂にハ經王宝殿と扁して中央に妙典の題目 此内  
に西山公御自筆紺紙／金泥の二十八品を籠れたり ひとりみきに釈  
迦多寶の二尊ならひおハします、本堂のうしろを聚石堂  
といふ、生法師石を集めて法華を講せしかハ、石ことこ  
とく傾きふして聴聞せしといふ心なるへし、此堂に久昌  
院日勻大師の御位牌を安置せられたり 則西山公の御母儀／  
靖定夫人といへる御事也 それより長廊をへて方丈にいたる、

方丈のうしろに岩きりとほす洞ミち五六十間はかりもや  
有らん、その洞を通りて左の方に庵室あり、摩訶衍庵と  
いふ四字の額ハ西山公の御筆とそ、古雅清哥にして字こ  
とに八法をそなへさせ給ふとそおほゆ、この庵より見わ  
たセハ十坊と称して十字の坊舎あり、更に谷を隔て三味  
堂といふにハ、談所衆寮をたて、無数の僧侶を集めて法  
華の講席をまうけらる、この頃の能化ハ京師妙頭寺前の  
上人日耀師なり、抑當寺ハ延宝年中に御創建、日忠上人  
を開山として御母公の菩提を推薦し給ふとそ、まことに  
孝ハ萬行の第一なることわりもおもひ出られて、いとた  
ふとくと拝し侍りぬ、天神林へハほと近けれハやがてま  
うてぬ、鳥居に金字をもて七代天神宮と掲げぬるハ是又  
西山公の御筆とそ、いはゆる七代ハ國常立、國扶植、豊  
斟亭、泥土煮、天戸道、面足、伊冊<sup>伊冊</sup>諾の尊也、おきな  
諸國を巡礼してあまねく神社の御正体を問たり侍りし  
か、この七代を一社にあかめ奉る事をいまたきかす、あ  
はれいつれの世誰の人の尊崇せし御社にや

久かたのあまつ御神の七はしらふとしきたてゝいはふこ  
の宮

額田村をすきて向ひ山といふ松山の中に浄鑑院といふ  
浄土宗の寺あり、これハ源威公の御せうと萬千代君をほ  
うふりまいらせたる所也、勝地おのつから世塵をはな  
れ、道場さながら浄域をうつして専念のつとめもます  
くすゝみぬへきさまなり

寺の名の浄きかゝみにむかひ山わか身の後の影やうつる  
と

猶道すなからの参詣、さのミハとて例のもうしつ暑き  
日影をさけて夕すすみのころ梅戸にかへる 廿五日、  
白井信胤の亭にて百韻興行ありしに発句をすゝめられ  
侍りしかハ

松ならふかけやすゝしき千代の宿 一傳

しけりそひぬる庭の若竹 信胤

みしか夜の更行月に端居して 徳平

七月十三日、為章をあなひにて那珂川より船に乗て湊  
村にあそふ、船中にて

へたてなくかたるおや子のなか川ハ心にかゝる浪風もな  
し

返し為章

君とわかなかの川浪そきよく千とセのかけの見える嬉  
しき

天妃権現へまいる、これハ渡海風波のうれへを守り給  
ふ神にて、もろこしの舟つきにハ多くあかめまつると  
や、それより岩船山願入寺 親鸞ノ宗へ参り、又海つら  
をつたひて大洗磯前の社へ参詣す、大奈母知少比古奈の尊  
とて齋衡三年に此所に跡をたれ給ふよし、文徳実録に  
みえたり、今も社の前にこゝらの岩あり、しら波打ちよ  
せてくたけちるさま卯の花かきの風にひるかへるかこ  
とし、磯の濱といふ所までゆくくゝ かいつものあさり  
侍りて

日のもとはててふ国の濱あそひいけるかひをもひろひ  
てし哉

いつしか八月にもなりぬ、帰りこん秋をちきりて、と  
いひしことくやゝ帰京を催したるに、これかれやんこ  
となき抑留ともさすかいなひかたくて、來春まで逗留  
すへきになりぬ、三五夜中の月、例のとしよりはこよ  
なくすままさりたるに二千里外の古郷をおもひやりて  
ふるさとハ幾重千さとの海山もへたてぬ月にゆく心かな

また発句ひとつ　うかれきて月に宿かるこよひかな

九月十二日、日光山八年ころ参詣のねかい深かりしに、幸ひ水戸よりわつかに三日の旅なれハおもひおこしてけふしもかと出ず、常葉、大部、鳴沢などいふ村々をへて、入野の里に小松寺真言宗といふハ、むかし小松の大臣の郎従筑後守貞能かの大匠かくれ給ひて後、夫妻ともに出家して追善の為に造立し侍るとかや、すなはち大臣の位牌を安置して今の世までも不断の勤修を廻向すとそ、かのもろこし育王山の法事ハかきりあれハ廃れたることもや有らんに、まのあたり此國にてとふらひ参らするを過去聖靈もさもうれしくや受給ふへき、さるハ貞能のぬし忠義のまこといともたふときためしになん、しはらく法施まいらせて

たえやらぬ御法も千代の小松てらふりにし跡をとふ手向かな

古内村の清音寺ハ中峰國師の法嗣復庵和尚の開基とそ、松ふり雲しつかにして殊勝の禅林也、猶さとくを過て塩子といふ村につきて岩屋の観音を拝む、寺号ハ佛国寺真言宗菩薩安座の岩屋へこなたより廊橋をかけ

てわたる、橋の下ハ深谷いくはく丈か有らん、かの天台山の石橋もかくやあらましとおもひやらるゝさま也、此ころの雨に道いとあしくからうしてもて木といふ宿に着ぬ　十三日、もて木を出て埜、うはかひ、道成宿など過て絹川をわたり、ゆくく、茫茫たる野はら、時しも秋のあさち色つきて尾花、野菊など咲ましり、葛の葉の風にみたるゝハたれをうらみてなととふ人もなしや、是則那須野にして、雀か原、小金原などいふに續きて四十里余の廣野なりとそ、殺生石への旧蹟へハ六七里ほどありといふ、那須與市の城山といふもほのかに見ゆめり、この野に高茅、子鹿などをふるくもよみたるとおほへ侍れハ

秋ふかき那須野かはらの高かやに妻やこもれる雄鹿暗也

宇都宮ハ近國交易の所なれハ、市町のあきものいと賑ハしく富商の家々軒をつらねたり、けふハこの宿にやとりて明神へ参る、神境ものふりて巍々たる大社也、扱もこよひハ名にしおふ後の名月いとくまなく晴たり、おもひもかけぬとつ国の月を見るも嬉しきものゝ、又古さとこの空おもひいてゝ一かたならず、駅のあるし芋酒

などすゝめて月を賞す

おもひとけハなにか心にうつつのミやくもりなき夜の月をなかくて

十四日、徳次郎、かぬま、大沢などいふ里々を過て、室の八島ハいつくのほとにやととふに、それは壬生といふ所に侍りて、道へたゝれりとかたれハゆきてミる事あはす

遠かたや一むらふかき秋きりハ室のやしまの夕けふりかも

となかめやりて過ぬ、今市をこして鉢石に着ぬれハ本月坊にあないしてやとりをもとむ 十五日、沐浴して御宮めぐりす、大屋川に幕府御参詣の御橋あり、あとさきに柵門を戸さして、常の人ハこゝを通らず、別に假橋をかけてわたり通ふ、この御橋を山菅の橋といひて古歌にもよミたるやうにおほゆ、橋をわたりて深沙大將の杜あり、この神の修法真言家に傳ハれりといへども、勧請したる所まれなれハいとめつらしくをかミ侍りぬ、それより爪先あかりに上りて左の方に幕府の御旅館石の方に日門主の御本坊あり、さて一二の鳥居を入て

經藏、鐘樓、鼓樓、唐門、神馬所、御手水所、歌仙の間よりはしめ 東照權現の御宮いとつきくしく、仙人、唐人、花木、鳥獸の彫もの金銀をのへ珠玉をミかきたる莊嚴、めもかゝはゆくこゝろもそらにてこと葉にも筆にも盡すへき方なし、けにも御當家の御祖神なれハ天かしたのちからを盡すのミにあらん、こまもろこしの材木をさへもちひさせ給へハ、寸木寸金の結構ハさながら御本地薬師如来の淨瑠璃世界をこゝにうつし給ふにやといとたふとし、かたはらにうつくまりて心經數十篇を誦して法味にさゝけ、れいの腰をれを吟して法樂にそなふ

天かしたくもりなけれハ東より照すひかりをたれかあふかぬ

それより御本地堂、三佛堂、大猷院君御佛殿、常行堂、法華堂、新宮權現などを巡禮し、さらに三本杉、瀧の尾權現を拝す、爰に坊舎ありて別所と名つく、日こる聞およひたる食賣の器をかけならへたり、それより下りて地藏堂、御座屋、しら山などををかミ本宮へ参詣す、こゝにも別所あり、すへて此のミち筋小寺院の軒を

ならへ、石かきを疊ミていかめしく造られたり、いなり川を右の方になかめて御橋のもとへかへり、西にあゆミてかんまなか淵にのそむ、扱も中禪寺ハ峰嶂たる山寺を四五里はかりよち登るといへハ、老のあゆミかなひかたくて遙拝してやミぬ、黒髪山ハ代々の集に入たる名所なれはもたしえすして

そめわたす峯のみちをたつた姫黒かミ山のかさしとそみる

巡禮なをあきたらすおもひなから、雨ふりいてゝ風ひやゝかなれハ老をいたはりて下向し、院主のものかたりを聞に、當山のむかし二荒山と名つくるハ人王四十八代称徳天皇の御宇、神護景雲年中に大己貴尊、健御名方命二神御現ましませしか、ともに荒神にて春秋の二時にかならず風雨震動あらましましきゆへにかく名つけ侍しとかや、開山勝道上人神護景雲より天應年中まで三度攀躋を企てゝ、つゐに神宮寺を建立し給ひ、後に弘法大師登山有て二神のあらましましきをなごめ奉り、山の名をも日光とあらため給ひしとぞ、猶委しき事ハ性靈集元亨釈書に見え侍り、むかしハ真言の靈場也しをちか頃

慈眼大師の中興より天台の法燈をかゝく、御領ハ凡そ二万石、衆徒二十人、一坊八十人、社家衆人よりはしめ諸司のそなへまことに嚴重の御崇敬也、御宮の額ハ後陽成院、後水尾院の勅筆あざやかに拝れ給ふなど、何くれとたふとき物かたりともいとねんころなれと、愚かなる心にハ十にひとつをも覚え侍らす、琉球より奉れる燈籠、朝鮮よりさゝけたる鳧鐘ハさらにたくひなくめつらかなる事にこそ、鐘の銘ハすなはち朝鮮人の作なり

日光道場為東照大権現設也、大権現有無量功德、合有無量崇奉、結構乃雄、世未曾有、継述之孝、益彰先烈、我王聞而歎喜、為鑄法鐘、以補靈山三宝之供、仍命臣植叙而銘之、銘云

不顯英烈 肇闡靈眞 玄都式廓  
宝鐘斯陳 參修勝縁 資薦冥福  
鯨音獅吼 昏覺魔伏 非器之重  
唯孝之則 龍天是護 鴻祚偕極

崇禎壬午十月日 朝鮮國礼曹參判李植撰

又過にし慶安元年四月十七日ハ卅三廻の神忌にあたれ

り、御宝殿の御戸帳の錦の織ものゝ紋によませ給ひたる  
後水尾院御製

〔略 末尾に画像を掲載した〕

此御製を心しつかによミときて見侍れハ、めぐりにハ  
とうせうのミやさむしうさむくはいきをうたとあり  
て、中に葉師佛の名号を七遍かそへ、和歌ハすへて十  
六首あり、誠に霜のたて露のぬきはたはりひろくおりな  
させ給ふ、錦の御心を神靈さそかしこくや見そなはセ  
給ふめりな 十六日、宿坊をいてはしめの宿々を通  
り、十八日の黄昏に水戸にかへり侍りぬ 廿二日、西山  
公より為実かもとへ御ふミ給ハる、このころ秋興にふ  
けりて徳田、君田の里々を通らせ給ふに、峯の紅葉さ  
かりにして、龍田山の梢よりも染まさりたらんやうに  
おもほす、あはれ都人の見はやし侍らハ、山姫のめいほ  
くになとかせ給ふによりて、常覚阿闍梨をはじめら  
れこれにふれさそひて、明日紅葉狩にともよほす、殿ハ  
儀はらといふ海つらに侍せたまふへしとそ 廿三日、  
人々伴ひて那珂川をわたり青柳村より太田の郷に至り、  
さとの宮といふ村を過るに薩都神社有、神名帳にも載

られてふるき宮居也、町屋村をこえて右の方に瀧あり、  
これなん玉たれの瀧と名になれたるよしを聞て、見  
に上らんといひてのほりて見るに、これもしらぎぬに  
岩をつゝめらんやうなるさまいとたくひなく見ゆ、お  
のくからうたやまとは多き中に、予も

いさきよくおち瀧つせの玉たれをまきあけ出る水のしら  
なミ

村々を経てたそかれ過る頃に大中村につきぬ、この所  
の富人織部といふか家をあさりの宿に、その弟か家を  
ミつからかやとりにあてられぬるよしいひて、何くれ  
と待まうけて夜更るまでけふの道すからの秋色をかた  
りあそふ 廿四日、小中、小妻を過て徳田村にいた  
る、この所の郷士 大森／傳右衛門、途中まで出むかへて、  
西山公よりこの山のもミち見せ申へきよし命せられ侍  
るまゝ、私亭へ立より侍るへきなどいひてあないする  
にまかせ、しはらく休足しるなから山々のもみちを見  
て哥かいつく

もミち葉ハここをせにせん露しくれそめて色こき徳田や  
まかな

また発句　そめにけりもみちむらこの木々の末

それより里川村にいたれハ爰の郷土　蓮見ノ甚五衛門　出迎  
て、さきの大森かいひしやうに述て、わりなく肩輿を  
その亭へみちひきて、また何くれともてなしつゝ歌も  
よほす

あらし吹峯のもみちをせきとめてからくれなみをさらす  
里川

君田村にいたるさとうちしくれしかは

しくれする空もいとほす山いく重こえてきミたの里のも  
みちは

こよひハ横川村にとまる　廿五日、よこ川を出て、取  
あげ坂といふさかしき山を越つゝ峠にのほればハ、蒼  
海まなこの下に湛へて白浪そらに飛たゝけり、島間應有  
國波外恐无天といふふることを吟してしハらく眺望す、  
その坂をまたはるくゝとくたりて、大塚、薄葉、木皿  
の里々をすき磯原の濱に着ぬ、御旅館ちかき家にやす  
みて餉賜りつゝ、猶日かけ高けれハ、名にしおふ莫來  
の関見にまかるへきよし仰せらるゝまゝ人々いさなひ  
て出て行に、右の方ハ海ちかくてあら磯波耳をおとる

かしていとかまひすし、神岡、粟野などいふ村を通り  
莫來の山を登る、峠に岩きりとをす事六七十間もやあ  
るらん、高さハ四五丈はかりひろさハ荷懸駄一定のか  
よふほとにて、上ハ猶セはくわつかに二尺はかりとお  
ほゆ、ふりあふきて空をミレハ、碧天ほそく見えてさ  
なから青流の大そらに流るゝなといひつへし、おの  
くゝ懐なる硯とりいて、岩打はらひて歌かいつくる  
に、阿闍梨ハ先年もこゝを見侍りつとて

命あれハふたゝひこえつ陸奥のなこそその関の名にハたか  
ひて　阿闍梨常覚

こゝにまつ名こそその関をすへ置て人まつ鳥の名ハかひも  
なし　法印宥賀

老の身ハなこそその関ときくきくも越てそ見つれ都かたり  
に　朴翁定為

みちのくの野わけ山わけあかなくにたれかなこそその関と  
いふらん　市川弘道  
たらちねを道ひくわれそ関の名のなこそハしハし戸さし  
わすれよ　安藤為実

こゝつらやなこそときけと見る人の心をとむる関の波風

肥田行正

をさまれる君か御國そさかもなき人ハ名こそその関とめよ  
かし

安藤為章

莫來山もる人もなき関の名にこゝろをとめて越そわつら  
ふ

安藤定輔

元祿十年九月廿六日同遊八人と書付たり、関山よりおり  
て濱はたにあそふ、陸奥の大洋渺々として目ちにかゝ  
る島山もなし、まさこの上につゝあしておもひやれ  
ハ、かぎりなく遠くもきにけるかなとものわひしきか  
たにおほえ、かの河内守親行か鎌倉にありて蘇武か漢  
をわかれし十九年の旅のうれへ、李陵か胡に入し三千  
里の道のおもひと書けんも思ひ出て、しきりに羈旅の  
情おこりようせずハなミたも落ぬへきころほひなり  
ふるさとの人に見セはやみちのくのあら磯波にぬるゝ袂  
を

是より右のかたへおもむきて九面の濱へゆく、山ミち  
いとさかしうしておのゝ馬のりものよりおりてよぢ  
のほりぬ、九面より平かたへ出る道に岩を切ぬきたる  
洞道なかくていとくらし、平かたハ仙臺より江戸へ運

送の船つきなれハ、富商の家々海にのそミ山にかけ作  
りてにきハ、し、大津の濱も平方におとらす見ゆ、  
やゝたそかれに磯原にかへる、殿の待せ給ふと告れハ  
やかて御旅館へまいる、御ものかたりのつみて、此こ  
ろのもみちはいかゝ見侍りつなとはせ給ふをりに  
たくひやハあらしの先にたつねきておもふまゝにも見し  
もみちかな

やゝありてよるのおもの酒肴しなゝにして夜半にお  
よひぬれハ、御暇申てまかて侍るに、あすのかへさの  
道すからそこそこを見せ侍るへきよし子侄に命し給  
ふ、こよひ磯原のとまり海はたなれハ、波の音枕に  
ひゝきていとゝ老のめさめかち也

よもすからいねもやられず磯原やあらきなミたゝこゝも  
とにして

廿六日、磯原をいてゝ上手綱村の長宏寺 本尊観音、日庵ノ

和尚開基、禪宗 能仁寺 本尊同上、慈覺ノ大師建立、天台宗 下手綱

村の大高寺 本尊不動、徳盜ノ草創、真言宗 などを巡禮し、

里々をすきて濱はたにいて栢槇山を見るに、浪うちき

ハ白砂の中に大なる岩あり、岩の上に一本の栢槇えだよ

り根を生し根よりさらに枝を生し、はひひろこりて岩をとりまき、周廻十町はかりの山をなせり、栢槇のわたかまりたるさま龍のことく、うつくまりたるいきほひ虎に似たり、あるひハ枝たれ舟のかたち稍高うして塔の姿に見ゆ、人工をからすして自然の奇形ハまことに稀有の見もの也、それより川尻の濱なと過て栄藏小屋といふ島山をみる、この島むかしハ田尻村の山に續きたりしか、あらしき波風にいつとなくくつれたえて、おのつから島となれりとそ、西山公の好事にて、こなたの岸より橋をかけてわたり通ふに、橋の下四五丈もやあるらん蒼波たゝへていとすさましく、股ふるひあなうらしじまる心地そする、島ハミな巖にしてまわり六七町もや有へき、数百本の松塩風におひさらほひつゝ見ところ多し、荒海の高しほ、山の崩るゝことくにおそひかゝりて、たましあもけぬへきやうにおほゆ、いつの頃にか有けん栄藏といふ法師この島に小屋を立て、おこなひたるよりすなはち此名を得たりとそ、此所の口碑に、大田尻ころもなきか<sup>(は殿)</sup>はたか島沖吹風ハ身にハしまぬか、と言ならハし待るとかたるを聞て、島にか

はりて返哥し待らんとて

あさな夕ななミのぬれ衣きるものをはたか島とハなに名付らん

此わたりより日もくれかたに及ひぬれハこよひハ滑川といふ里にやとりとる 廿七日、相川、守山などいふ宿々をこえつゝくれハ、この國にもみかの原いつミ川といふ所あり、けにも名寄に他國同名の名所をもおほく見え侍れハ、かならずしもかしこの名を爰にぬすミもちゆるにもあらさるへし、いつこにもあれ、古人の詠に入て名を傳ふるなんその所のさいはひといふへし、泉のわき出る処にしハし休ふほと

たつねきてけふみかの原いつミ川名になかれたるあさ瀬きよしも

久慈の濱を左に見て舟わたしをこへ、北河原村をすぎ村松山日高寺に参る、此寺ハ弘仁年中弘法大師の開基、本尊虚空藏菩薩は関東第一の靈佛にして貴賤の巡礼絶る事なしとそ、山ハミな白砂にしてまはゆきほとなるに、松のみとり青ミわたりつゝたくひすくなき勝景也、かなたこなたねんころに見めぐり侍るをわかき

人々もとかしとや思ふらん、いさかしといそかしもよ  
ほし侍れハ

いそかしよ名さへ日高の寺なれハかへさの道もくれしと  
そおもふ

正木か浦といふハ海につゝきたる湖水也、山めぐり水  
ひろうして繪にうつすとも筆も及ふましくなん、折し  
も山のみち散うかひて水のみとりにはえあるけしき  
青地の錦なといふへし

又たくひあらしの木のは散しきてにしきをあらふ浦の夕  
波

なと口すさみつゝ日のくれさるさきにと道をいそぎ  
て、やうく一毛坂を下れハ水戸の府城見たされて  
いと嬉し、水戸もしはらくの旅宿なるものを、いつし  
か冬になりてハ古里よりも寒氣甚しきゆへにや、目ま  
ひ鼻すゝりかちなるも、おもへハまた七旬に過てにや  
ハしからぬ長旅に労したるなるへし、ひたすら爐をか  
こみて坐禅讀誦の外ハなすわさもなく、たゞ冬籠りて  
のミあかしくらしぬ 西山公のあつめさせ給ふ扶桑拾  
葉集ハ年頃聞およひ侍りしか、さひはひ子共に賜はせ

し本を披見し侍りて

君かかく拾ひ集めししきしまのやまどことはハ世々にく  
ちせし

白井信胤より、年もかへりなハ一會せまほしとて発句所  
望あるに、さのミいなひかたくて、かの日本武尊の筑  
波をこえていく夜かねたるとあそハせしハ、この國の  
名所といひしかも連哥の權輿なれハおもひとりて

筑波山こえていく日敷春霞

あら玉の年立かへりぬれハ、いつしかと空のけしきも  
のとやかに松たてわたしたる大路の清らなるに、府中  
の諸土布衣、素袍あるひハ長袴、半袴などおのく品  
格をまもり、馬鞍のかさりまでもころくいとミか  
きて賀禮を述ありき、いとにきハゝしき春の粧ひなり、  
いはゆる俗しにもうるハしきも、風かみにたゞしき府  
君の御徳によれるなるへし

あつまちや國の名にあふひたち帯八千代をかけていはふ  
春哉

此一帖ハ前内匠頭定為朝臣入道朴翁一傳居士東遊の日

記也、和歌の幽玄文章の壯麗なるのミにあらず、いにしへ今迄の紀行の中にかくのこく道里の長く事蹟の詳かなるをいまた見ず、誠に居士の才能廣く学の達せる事此巻を開て是を知へし、茲年の春、居士あつまより歸りのほりて予か幽居を訪ひ、この題号を定むへきよし命せらるゝに、予かいはく別に他に求むへからず、さいはひ巻尾の歌を用ひらるへしやと、居士うなついでやかてひたち帯と題せらる、則此赴を書くくへしとのたまはずに、任せていさゝか禿毫を染るものなり、時に元禄十一年仲秋十一日になむ

静齋

ひたち帯ハ家藤の行紀也、草稿、中書、浄書の三本あり、其草稿ハ去年の春帰山の折ふし為章に賜ハる、中書ハ千とせ山へ持給ひて、かしこを削りこゝを添てつひに浄書をさしめて、かの草稿をも改正すへきよし命し給ふまゝ校合数回の後、さらにうつして家寶なに物か是にまさるへしと思へり、かつ千年本は休山子奥書を加ふ、浄書にハ静齋、源公久我前中納言通名卿跋をかゝせ給ひぬ、後生児孫あなかしこ、此本をもて定本とすへし

安藤為章

餞別詩歌附 「送り仮名及び返り点は略」

元禄戊寅季春望日、常陽久慈郡幡村旌櫻寺花下聊設饗宴、送朴翁安藤居歸故山

告別花前情益傷 離愁欲忘屢揚觴

清香滿襯錦衣色 春餞行人歸故郷 西山樵夫 光園卿也

忽迎高駕照蓬華 爛熳櫻花一片心

惜別通宵宜秉燭 恩風無限恩情深 宗安和尚 親住

櫻花遠招洛陽賓 千紫万紅色傳新

唯恨君今頻報別 遊宴此去又何春 宗壬首座

稠蕊堆雲照彩霞 停盃話別日西斜

逢人若問常陽事 第一當須說此花 井上玄桐

旌櫻樹下一樽開 風送清香入酒盃

蟠屈摸庭映斜日 花邊却恨別情催 野草人見新三郎

佳木著芳幽寺前 枝頭雪滿興猶鮮

吟來堪恨白櫻影 高客添輝薄暮天 主敬 大久保与九郎

いとゝさへあかぬ思ひを山さくら花も別れを人におしま

ん

兼循上人

立かへる道もおほえす旅衣名残を思ふ花の木かけハ

朴翁居士

めぐりこむ春をそ契る思ひ出を行もとまるも花に残して

安藤為実 内匠

旅衣たち行人をしハしとて花の物いふ木陰ともかな

安藤為章 右平

名残あれや庭白妙の花さかり見すてゝかへるけふの別路

安藤定輔 李進

くる春の花のなかめをいく度かわかれぬ花にちきる木下

馬場高通 佐五右衛門

わかるとも花の木陰にまとみして家路いそくなけふの稀

鈴木宗興

わかれ路の猶そおしけれ木のもとの花に数そふけふの名

残ハ  
梅沢音安 久太夫

わかるとも春ハ來まさね木の下の花の圓居の名残わすれ

岡山敬勝 次郎助

す  
花にあかぬ心より猶わかれ行人の名残もおしき木の下

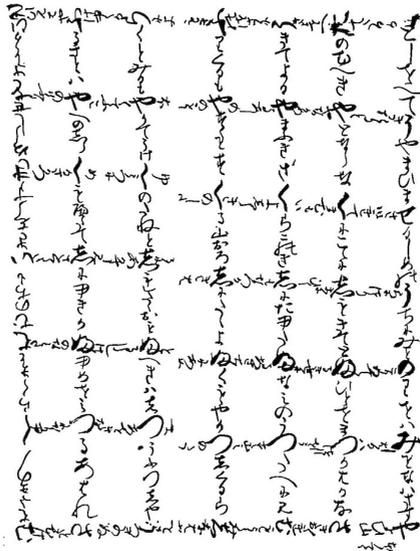
狩野春可 文八

さらに猶わかれそおしきまれ人のけふのまとみの花にな

るれハ

沼田元盛 武介

〔29頁 日光東照宮 後水尾院御製錦織物〕



安藤朴翁 ひたち帯

二〇二二年三月五日 制作

編輯・発行 古文書学習会

茨城県日立市宮田町五―二―二二  
日立市郷土博物館内